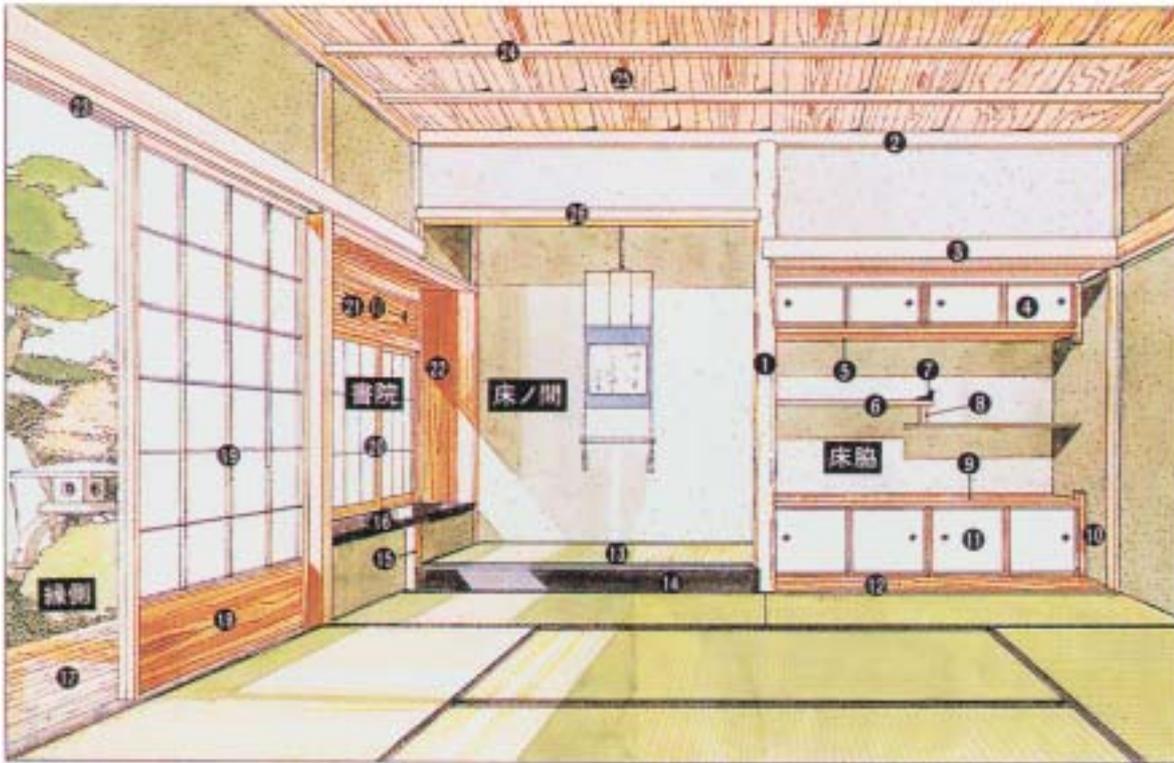


# 伝統的な和室の構成

## 伝統的な和室の構成 床の間の各部名称



- 床柱（とこばしら）
- 廻縁（まわりぶち）
- 長押（なげし）
- 天袋（てんぶくろ）
- 天袋板
- 違棚
- 筆返し
- 海老束（えびつか）
- 地袋天板
- 戸当り
- 地袋
- 前地板
- 畳床（又は板床）
- 床框（とこかまち）
- たたら束
- 書院甲板
- 縁甲板
- 障子腰板
- 障子
- 書院障子
- 書院欄間
- 書院妻板
- 鴨居（かもい）
- 竿縁（さおぶち）
- 天井板
- 落掛

「行」の建築は、堅苦しい手法ではなく、主人の日常生活の場であり、ややくだけた接客ができる程度のものである。真の建築より形式的なものを、少し省略しています。床柱も角材は使わず、面皮柱や磨き丸太を用いたり、格式より居住性を重んじています。

「草」の建築は、真・行にくらべまったく自由自在に、適当な自然の材を使って、華奢な様式と構造にしたもので、茶室、数寄屋をさしています。小丸太や竹などを巧みに使い、杢石なども自然の丸石を使うなど、自然にとけこんだ建築になっています。

そして真の建築には、真の床の間、真の掛軸と、構造や様式がすべて一致している、同格のものでなければなりません。格式はった部屋に、くだけた感じの床の間はそぐわないわけで、つまりバランスを考えた一つの原則といえます。

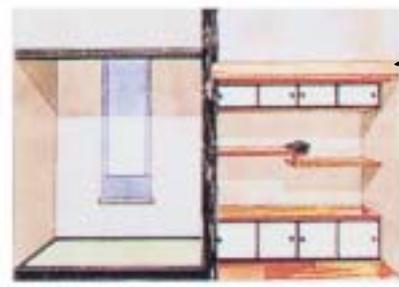
しかし最近では、一般住宅においては、古典的な真・行・草が混然一体となって生かされています。

真・行・草は、和室を演出したり、床の間の形や材料の取り合わせなどを考える上で、重要な基本となっています。

日本建築には、書道の楷書、行書、草書などの書体に違いがあるように、建物にも格式や気品をあらわす、真体、行体、草体があります。

「真」の建築は、一番格式はった建築です。様式の正確さと構造の割り出しに細密をつくしたもので、宮殿とか將軍の対面の場などのように、正式の主客を招くための形式化された建物です。外観も本瓦葺か檜河葺で、内部も格天井・竿縁天井、柱・長押類はすべて角材で組み立て、鋸り金具を取り付けた格式はった構えです。

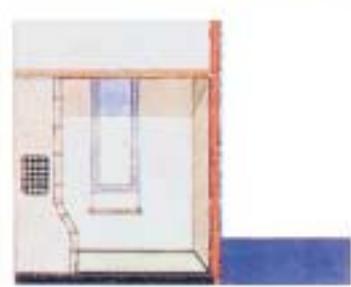
### 日本建築には、真・行・草がある



真



行



草